

メッセージ「あくのじゅうじか」

水谷 憲 牧師

聖書 ヨハネによる福音書 10章1-6節

昔、友人の牧師から聞いた話です。ある教会の教会学校での話です。ある日、分級で「伝言ゲーム」をしたんだそうです。ただそれは「伝言ゲーム」とは言っても、一般的によくやる言葉やジェスチャーによるものではなく、あるお題目（例えば「天国」）に従って描いた絵を、順に描き写して伝えていき、最後の人がその伝わってきた絵を見て与えられたお題目を当てる、というものでした。そして、その時は2チームに分かれてやっていたのですが、リーダーは両チームのトップバッターに、そっと同じテーマ、すなわち「イエス・キリスト」というお題を与えました。そして、それぞれが描いたイエス様の絵を伝えていった結果、一方のチームの最後の人には「ただのひげの生えたどこかのおじさん」のような絵しか回ってこず、当然それが意味する答を当てることはできませんでした。イエス様のつもりで描いていたのは最初の子どもだけで、次からはみんなも自分が何を描いているのか分かっていなかったのかもしれない。しかし、もう一方のチームの最後の方は、その答が「イエス様」だと正しく答えることができたというのです。

みんなが答えもはっきり知らされないまま描き写していった絵であるにもかかわらず、最後の人にはそれがイエス様だと分かったということは、そのチームのメンバーはみんな絵を見た瞬間に、「ははーん、これはイエス様だな」と分かっていたということでしょう。もちろんチームのメンバーが絵のうまい人であったか下手な人であったかも、多少は結果に影響していたかもしれない。しかし、それぞれのチームの最後のメンバーに回って来た絵を比べてみると、その上手か下手かということとは全く関係なく、決定的な違いがあったというのです。つまり正解のチームの最後の人が見せられた絵には、それが確実にイエス様であると分かるような特徴があったというのです。それは何だったのでしょうか。

それは十字架でした。男の人が十字架にはり付けにされていたのか、十字架を担いでいたのか、隣に十字架が描いてあっただけなのか、それは分かりませんが、しかし、いずれにせよ男の人と一緒に十字架が描かれていることによって、みんな「この人はイエス様だな」と分かったのでしょうか。

そしてこの話は、私たちにとっても大きな意味を持つ話であるように思います。

それはつまり「ナザレのイエスは、十字架があって初めてキリストとなったのだ」「あの十字架の出来事がなければ、イエスはキリストたり得なかった」「十字架がなければ、福音書も単なる偉人伝でしかなく、私たちの魂を救いと解放、復活への希望に導くキリスト教にはなっていなかったのだ」ということです。昔見た漫画で『聖☆お兄さん』というものがあって、それはイエスとブッダがこの世界、現代日本にひと時のバカンスのため、お忍びで来られるという設定の話です。お忍びなのでイエスもブッダもTシャツにGパンのような普段着でおるわけですが、誰も気づかない。ブッダのいかにも特徴的な髪型も、単なるパンチパーマくらいにしか思われないうし、イエスのいばらの冠も今風の若者のファッションと思われ、女子高生にジョニー・デップという俳優に似ていると言われてほくそえんでいる始末です。

キリストは十字架によって私たちの罪を贖ってくださった。それは私たち人間には、到底できることのない深い愛の発露であるところのものですから、いくら奇跡を起こそうが立派なことを言おうが、十字架を抜きにしたイエスはその辺にいるようなただの青年でしかなくなってしまうわけです。そして、私たちのキリスト信仰も十字架を抜きには語れないはずなのです。

本日の聖書は「羊の囲いのたとえ」という話です。「はっきり言うておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないで他の所を乗り越えてくる者は、盗人であり、強盗である」。そりゃそうだ。ちゃんとした羊飼いなら、正式に堂々と門から出入りするでしょう。「門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける」ということですから、「門を通らない者」というのは、逆に「門を通らせてもらえない者」なのでしょう。怪しいですね。やはり盗人・強盗の類でしょう。現在は宗教も多様化しており、キリスト教も様々な宗派・教団に分かれています。その中にはキリスト教を語っておりながら、実質的には全く別物である宗教もあります。ではそれをどのようにして見分けたらいいのか。それが「ちゃんと羊の門を通過しているかどうか」ということなのです。じゃあ、どうしたら「門をちゃんと通ってきたかどうか」が分かるのか。そこで必要になるのが、キリストの十字架なのです。

つまり、羊飼いと盗人の違いとは、キリストの十字架の意味を本当に語

っているかということ、文字通りの十字架の出来事だけでなく、その奥に秘められた神の深い御旨・私たちに対する慈しみの思いを語っているかということです。例えば「聖書のみ」というプロテスタントの大原則を無視して、新たな新しい教典・預言者を立てて、それに拠っているようなことはないか。私たちのために命を捨てて十字架についてくださったのは、「エホバの証人」の崇めるチャールズ・テイズ・ラッセルやら、「統一協会」(現在は「世界統一平和家庭連合」)の文鮮明やらのような、どこぞの預言者ではなく、ナザレのイエス、イエス・キリストしかいないのです。キリスト教を自称しながら、ラッセルこそアメリカに渡った使徒の末裔であるとか、文鮮明こそメシア・イエスの代理であるなどと言って、自分たち独自の教えを広めよう、信者を獲得しようとするのは、まさに「反キリスト」、門を入らずに塀を乗り越えて羊飼いの振りをしながら近寄る盗人・強盗のようなものです。羊飼いたるキリストは、十字架という門を通して罪深い私たちを救いに導くために来られたのです。十字架を通らずに自分の裕福な生活を確保しようとしたり、信者から吸い上げた利益をむさぼっているような羊飼いは決してキリストとはいえません。私たちはその声を注意深く聞き分けなければならないように思います。

また、「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す」と続けて書いてあります。パレスチナの羊飼いたちが自分の羊すべてに、それぞれ名前を付けているように、神様も私たちのことをこの世でただ一匹のかけがえのない羊として認識し、悩み苦しみ、試練の多いこの世という囲いの中から外へと連れ出してくださるのです。のみならず「羊飼いは自分の羊をすべて連れ出す」「先頭に立って行く」とあります。外へ連れ出しておいて放ったらかしには決してしない。もちろん中には、囲いから出て行くのに、モタモタしてしまっている羊もいることでしょう。囲いに未練があつて、なかなか出て行くことのできない羊もいるかもしれない。しかし、羊飼いはその全てが出てくるまで、待っていてくれるのです。みんなのことをちゃんと見ていてくれるのです。みんながちゃんと出てくるのを待った上で、「羊飼いは先頭に立っていく」と聖書には書いてあるわけです。

100匹の中の単なる1匹ではない。ちゃんと名前の付けられた、かけがえのない一匹として、羊飼いは私たちを見てくれるのです。キリストも私たちを見ていてくださるのです。神様も私たちを見ていてくださるのです。それこそ、十字架の愛とまさしく同じ慈しみです。自分の下に集まった信者を金集め・信者集めのための道具としてしか見ず、無理やり財産を献げ

させたり、挙げ句は消費者金融から莫大な金を借りさせたり、そんなもの私たちが大切な1人として愛してくださる神様のなされることでは決してない。そのような意味で、私はあえて強い言い方ですけれども、特定のいくつかの宗教、「統一協会」や「エホバの証人」や「モルモン教」は、キリスト教などではなく、この聖書のいうところの盗人であり強盗であると言わざるを得ないと考えています。

今日のお話の題は「あくのじゅうじか」としました。これは私が小学生の頃に聞いた話なのですが、みなさんも聞いたことがあるかもしれません。ある女性がスーパーに買い物に向かったところ、いつもと様子が違って店の前に誰もおらず、駐輪場もがらんとしている。時計は朝の9時半を示している。今日は休みだったかしらと扉の前まで近づいてみて気付いた「…開くの十時か…」…っていう小話であります。

羊の囲いの前にある門には門番がいます。門番は誰にでも門を開いてくれるわけではない。門番に門を開けてもらって中に入ってゆくためには、十字架が必要なのです。羊の門が開くには十字架が必要なのです。門があくのは十字架がいるんです。「もん・あくの・じゅうじか・いるんです」……。まるで「インディアン嘘つかない」みたいなイントネーションになりましたけど、ですから、巧妙に近づく盗人・強盗に惑わされないために、私たちは羊飼いの声を注意深く聞き分けなければなりません。その声が本当に私たちを愛してくださっている羊飼いのものであるかどうか、その者が十字架を示すことによって門をちゃんと通ってきているかどうか、しっかりと見極めなければと思います。そして私たちのもとに近づく者が、門を通って入ってきた羊飼いでない時、私たちはそこから距離を置いて、フラフラとついてゆかないようにしなければいけないように思います。もちろん、世の中には様々な宗教があります。まっとうな教えもたくさんあります。仏教もイスラム教も然りです。しかし、私たちは「キリストに従うんだ」とそれぞれが決心した以上、キリストでないものとキリストとの判断は厳しくしていかなければならないことを思います。

私たち自身のイエス・キリストへの信仰の中にも、十字架というものがちゃんと入っているだろうか。イエス様イエス様という思いは持っていても、何で私たちはそうやってイエス様を慕っているのか。それはやはり、イエス様が私たちのために十字架について下さったからではないのか。そのところを私たちは、いつも覚えて、大事にしていきたいと思います。